



優雅におよぐ白鳥の水面の下は…

9月、今年度の折り返し点が近くなって来ました。久しぶりのコラム担当ですが、落ちついた感じのないまませかせかと5カ月が過ぎたように感じます。

図書館の心臓部は多くの資料(蔵書)ですが、それを扱うのがカウンターにいる職員です。カウンターの職員が私のようにせかせかした状態では、利用者の皆さんが安心してゆっくりと図書館ですごすことはできないのだと思います。幸いなことにわが図書館職員は忙しくても顔に表さずにゆったりとした表情で利用者の皆さんに対応していると私は感じていますが、いかがでしょうか。その分裏では忙しく働いているのですが、そんな状況を見ていて季節がかなり早いのですが白鳥を思い浮かべた次第でした。

ここ栗盛記念図書館には、ありがたいことに書架整理のお手伝いをしてくださる方々、毎月「ホッとタイム」を実施していただいている『栗盛記念図書館後援会』の方々、「おひぎにだっこのおはなし会」をしてくださる『おはなしの森』の方々と、たくさんのボランティアの方々がおり、多くの皆さんに支えられて成り立っています。ダブっておいでいただく方もいらっしゃいますし、本当に図書館が好きなんだなあとありがたく思うことの多い5カ月でした。

❖絵本は誰のためのもの？読み聞かせて？

先月機会があり、「読み聞かせボランティア交流会」と「～絵本を読んで脳を活性化～絵本読み聞かせ講座」に参加させていただきました。もともと絵本は好きだったので、自分の子どもに読んであげるのとは別に買った絵本があったり、友人にあげてしまい手元に残っていない好きな絵本もあったりですが、絵本って誰のために創られたものなのだろう、とふと考えた研修会でした。

講師の方が読み聞かせ実演で紹介された絵本で「いろとりどり」（講談社）と「あいたくなっちゃったよ」（ポプラ社）は、聴いていて大人がとても共感できるものでした。

絵本は絵本作家のメッセージ。読み聞かせは、読み手がその本を選んだというメッセージとして、本のドラマを大切な人(絵本作家)から大切な人(聞いてくれる人たち)へ伝えることに意味があること、そんなことを共感の中で学ぶことができました。

6月、絵本作家の読み聞かせで来ていただいた塚本やすし氏の作品は大変面白いと感じました。こういう絵(本)でいいのか、とも。加えて彼の読み聞かせは、今までの読み聞かせの範疇を超えていると思う衝撃的なものでした。読み聞かせは画一的である必要があるわけでもないと思いますし、絵本作家のメッセージを大切に

伝えることを守れば、（他に守るべきことやポイントはあるにしても）誰にでもできることだということです。

❁古本まだまだあります

今年は初めての図書館まつりがあったため、力を入れて皆さんから古本をお寄せいただきました。その本が結構残っています。現在も正面玄関を入ったところに「雑誌、古本さしあげます～ご自由にどうぞ～」の貼紙の下に置いてあります。順次補充していますので、気に入った本があるかどうかは運次第ですが、立ち寄ってみてはいかがでしょうか。そしてそのときには図書館の奥のほうに、皆さんを待っている本が眠っているかもしれませんので、足を延ばしていただければと思います。（保）